

研究業績等に関する事項

著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(学術論文(和文)) 1. 里山における環境芸術	共	2019年5月	環境芸術学会学会誌『環境芸術』第22号(査読有)	栃木県那珂川町で実施したアートプロジェクト『KEAT』で制作した作品と、その意義についての考察。 (共同研究者: 船山哲郎、小佐原孝幸; 共同研究につき担当部分抽出不可能) (pp. 64-69)
(紀要論文) 1. 学生によるワークショップづくりプロジェクト「TOKIWAまちなカラボ」の構想と実践	共	2014年3月	常磐大学人間科学部	本研究の目的は、現代の社会に生きる学生たちの実態を踏まえた上で、大学の地域連携活動における学習環境デザインのありかたを考察し、大学生の学習のために有効なデザインをみつ引き出すことにある。本稿では、そのような学習環境デザインとして、ワークショップに着目することの意義を明らかにする。また、研究の一環として実践している、ワークショップ・プログラム「TOKIWAまちなカラボ」の活動について報告し、現時点(2014年1月)での状況と今後の課題を示した。 {共同研究者: 中村泰之, 石田喜美; 共同研究につき担当部分抽出不可能) 『人間科学』第31巻2号 (pp. 71-78)
2. アート・デザイン活動による学生と地域との連携およびその教育的効果に関する研究	共	2014年3月	常磐大学人間科学部	2000年以降、アート・デザイン活動を通じた大学と地域との連携を図る試みが数多く行われてきているが、その社会的意義や教育的意義を理論的・実証的に明らかにしたものは数少ない。そのような背景を踏まえ、本研究は下記の3つの目的のもと実施した。 (1)アート・デザイン活動によって、学生と地域との連携を図ることの意義および課題は何か。他の地域活動に比べて、どのような特徴があるかを明らかにする。 (2)地域でのアート・デザイン活動によって、学生にどのような教育的効果をもたらされるかを明らかにする。 (3)学生自身がアート・デザイン活動を地域で展開する上での実践上の課題は何か。その課題に対してどのような支援を行えば良いかと明らかにする。 これらの目的を達成するため、ひたちなか市那珂湊地区の夜市「DoNightマーケット」を主なフィールドとして2年間の調査研究をおこなった。 {共同研究者: 中村泰之, 石田喜美; 共同研究につき担当部分抽出不可能) 『人間科学』第33巻2号 (Pp. 131-134)
(報告書・会報等) 1. 環境芸術学会学会報第29号	共	2018年7月	環境芸術学会	環境芸術学会学第19回大会案内号の編集業務の中心として、全体のとりまとめとデザインデータの作成を行った。 仕様: A4フルカラー 総12ページ

2.	環境芸術学会学会報第30号	共	2019年7月	環境芸術学会	環境芸術学会学第20回大会案内号の編集業務の中心として、全体のとりまとめとデザインデータの作成を行った。 仕様：A4フルカラー 総12ページ
3.	環境芸術学会学会誌第22号	共	2020年7月	環境芸術学会	環境芸術学会学会誌第22号の作品発表ページを執筆 (pp. 25-26)
5.	環境芸術学会学会誌第24号	共	2020年7月	環境芸術学会	環境芸術学会学会誌第24号の作品発表ページの編集・執筆・デザインデータの作成 仕様：A4フルカラー 総120ページ 内小佐原担当部分：12ページ
(学会誌・教科書・専門書への作品掲載)					
1.	環境芸術学会学会誌 第19号	単	2016年3月	環境芸術学会	環境芸術学会学会誌第19号のWorks (作品紹介)に見開き2ページで「ひたちなか海浜鉄道湊線駅名標」が掲載
2.	中学校美術 I 平成28年度～31年度版	単	2015年4月	日本文教出版	中学1年生が学習する『楽しく伝える文字のデザイン』の単元に《ひたちなか海浜鉄道湊線駅名標阿字ヶ浦駅》が掲載 (p. 36)
3.	中学校美術 II 令和2年度～5年度版	単	2020年4月	日本文教出版	中学1年生が学習する『楽しく伝える文字のデザイン』の単元に《ひたちなか海浜鉄道湊線駅名標中根駅》が掲載 (p. 40)
4.	GOOD DESIGN AWARD年鑑 2015年度版	単	2016年3月	公益財団法人日本デザイン振興会	グッドデザイン賞受賞に伴い《ひたちなか海浜鉄道湊線駅名標》が掲載 (p. 761)
5.	個人の関心から普遍性へ	単	2021年3月	環境芸術学会	奨励賞の受賞に伴い、今までの研究活動を概括した文を寄稿。
(国内学会発表)					
1.	みなとメディアミュージアム～小規模アートイベントを通じた地域コミュニティ活性化実践～	共	2011年 10月15日	環境芸術学会 第12回大会 (新潟大学/新潟)	茨城県ひたちなか市におけるアートイベント「みなとメディアミュージアム(MMM)」は、行政主体のトップダウンによって形づくられた大規模なアートイベントとは異なり、ボトムアップによって誕生した草の根型アートプロジェクトである。限られたリソースを前提とした小規模アートイベントは必然的に行政主体のアートイベントとは運営方法と、その効果および特徴が異なる。MMMの3年間を考察をすることでその社会的意義を明らかにする。 (共同報告者：小佐原孝幸、田島悠史、日高一馬；共同研究につき本人担当部分抽出不可能)

2. みなとメディアミュージアム～ボトムアップ型アートプロジェクトの変遷～	共	2012年11月24日	環境芸術学会 第13回大会 (東海大学/神奈川)	<p>小規模アートプロジェクトは大学や地域コミュニティ有志、アーティストによってボトムアップに進められる。しかし、その資金源や人材などの不足により、継続的に開催できるものが極めて少ない。そのため「ボトムアップ型アートプロジェクト」は地域に対しても、また芸術に対しても還元できる部分が少ないのが現状である。著者らが関わっているみなとメディアミュージアム(MMM)は「ボトムアップ型アートプロジェクト」としては珍しく、そのシステムを維持しながら4年間継続したアートプロジェクトである。本稿では、MMMで展示されたアート作品と地域住民の関わり合い方の変遷を年度別に分類。「場所許可型(1年目)」「場所紹介型(2年目)」「場所適応型(3年目)」「場所創造型(4年目)」の4つのフェーズを基盤に、ボトムアップ型アートプロジェクトを維持するための要因を探った。</p> <p>(共同報告者：小佐原孝幸、田島悠史、高草真生;共同研究につき本人担当部分抽出不可能)</p>
3. アートプロジェクトとアウトカム [2013年度部会報告]	共	2013年10月26日	環境芸術学会 第14回大会 (西日本工業大学/福岡)	<p>アートプロジェクトでは芸術作品の展示だけではなくワークショップ、シンポジウムの開催など多様なプログラムが行われている。しかし、私たちはアートプロジェクトの実施内容(アウトプット)に囚われ、そのアートプロジェクトが生み出したもの(アウトカム)については、見失いがちである。そこで本部会ではアートプロジェクトとアウトカムというテーマのもと、アート作品を活用したグッズ等、物質的なアウトカムから、ソーシャルキャピタルの幅広いアウトカムと想定している。1年目は3つの事例を紹介した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●イチゴダッペ(みなとメディアミュージアム) ●みなとカフェ(みなとメディアミュージアム) ●ツマリ・コメ(大地の芸術祭) <p>(共同報告者：小佐原孝幸、田島悠史、栗飯原典久;共同研究につき本人担当部分抽出不可能)</p>
4. アートプロジェクトとアウトカム [2014年度部会報告]	共	2014年10月4日	環境芸術学会第15回 伊香保大会 (群馬県伊香保温泉街/群馬)	<p>地域アートプロジェクト関係者へのインタビューを通して、そのイベントが獲得した「アウトカム」を調査した。本稿では、その中から物質的なアウトカムを2つ、精神的なアウトカムを2つを紹介する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●小砂ホタル米(KEAT小砂環境芸術祭) ●みなとカフェ(みなとメディアミュージアム) ●人的ネットワークの形成(新宿クリエイターズフェスタ) ●地域の協力による上映会の開催(今日、この島に私がいます) <p>(共同報告者：小佐原孝幸、田島悠史、中村泰之、渡邊哲意、杉田このみ;共同研究につき本人担当部分抽出不可能)</p>

5.	アート・デザイン活動による学生と地域との連携およびその教育的効果に関する研究 - ワークショッププロジェクト「TOKIWAまちなかラボ」の実践 -	共	2014年10月4日	環境芸術学会第15回伊香保大会 (群馬県伊香保温泉街/群馬)	本研究の目的は、現代社会に生きる学生たちの実態を踏まえ、より有意義な学習環境をデザインすることにある。そのような学習環境デザインとして、ワークショップに着目することの意義を明らかにするとともに、現在、本研究の一環として実践しているワークショッププロジェクト「TOKIWAまちなかラボ」について報告した。 (共同報告者：中村泰之、小佐原孝幸、星遥佳、中沢梨乃、長谷川沙羅;共同研究につき本人担当部分抽出不可能)
6.	準公共物の媒剤性の発露を目的とした表現	単	2015年11月14日	環境芸術学会第16回大会 (京都嵯峨芸術大学/京都)	私たちの日常に溶け込み、様々な場面で日々の生活を支えてくれる公共物(信号機、ガードレール、踏切、街灯等)は、その役目から必然的に多くの人の目に触れる場所へ設置されていることが多い。公共物はその機能のみを果たしていればよいものなので新規性を付与するという考え方が及びにくく画一的なデザインが採択されやすい。しかし、このような公共物の性質を踏まえると、実はそこには表現の新たなコミュニケーションデザインの鉱脈が眠っていることに気づく。本稿では、準公共物のひとつとして機能の拡張を放置されてきた駅名標に着目し、地域の問題解決のきっかけとなるべくリデザインした『ひたちなか海浜鉄道湊線駅名標』のデザイン設計とその波及効果について考察する。
7.	美術教材(掛図)のメディア特性とその活用法	単	2016年11月13日	環境芸術学会第17回大会 (女子美術大学/神奈川)	中学・高校の美術教育では、国から各学校へ2種類の学習用教材が無償給与される。ひとつは「教科書(教科用図書)」、そしてもうひとつは「掛図(掲示用大判資料)」である。教科書は学習指導要領に則って構成され、それを補助する教材である掛図も同様の単元を扱う。ただし掛図は教科書と異なる鑑賞体験を与えるものとして、その制作において、さまざまな加工が許される。掛図のメディア特性を掘り下げることによって、アートやデザインへの興味を喚起するあらたな教材をつくることはできないだろうか。本稿では中学生を対象として制作した掛図15点の中から「風神雷神図屏風」を中心に紹介する。
8.	地域を見る目を育むコミュニケーションデザインの設計	単	2017年10月2日	環境芸術学会第18回大会 (島根県仁多郡奥出雲町周辺/出雲)	茨城県ひたちなか市那珂湊地区にて、新しい観光案内板を制作した。新観光案内板の大きな特徴は、字の一部が観光地固有のコンテキストを表現したイデオグラムとなっている点にある。観光分野において県内第2の入込客数をほこる地域であるひたちなか市では、近年、東南アジアからの旅行者が増加している。好奇心を歓喜する観光案内板を適切な箇所に設置し、まちの深部へとスムーズに旅客を誘導することで地域に点在する観光資源を有機的につなげることを試みた。

9.	駅名菓トレンシエ - ひたちなか海浜鉄道湊線駅名標から生まれるアウトカム -	単	2018年12月1日	環境芸術学会第19回大会(東京藝術大学/東京)	『駅名菓トレンシエ』は、社会福祉法人ハートケアセンターひたちなかとともに開発したお菓子である。同施設は、ひたちなか海浜鉄道湊線中根駅の近くにあり、開発にはひたちなか海浜鉄道株式会社が協力している。同鉄道の各駅ホームには、筆者が2009年に制作した『ひたちなか海浜鉄道湊線駅名標』が設置されており、この作品から着想を得て『駅名菓トレンシエ』は誕生した。地域資源と結びついた駅名標自体が、あらたな地域資源となり、地域の課題解決へ貢献したことが示された。
10.	リソースグラム - 名とピクトグラムを結合した新たな情報伝達手法の開発 -	単	2019年10月6日	環境芸術学会 第20回大会(増上寺/東京)	地域の名称とその土地の資源を表すピクトグラムを結合することによって新たなコミュニケーションを誘発する『リソースグラム (Resourcegram)』という表現手法を考案した。2009年から制作をはじめ、この手法によって制作した作品群は、現在ひたちなか市を中心に各所に設置されており、来訪者の地域へのまなごしを育てている。またそこから、地域のお土産、舞台のアートワークにも転用され、さまざまなメディアへと広がりを見せ、地域活性化に貢献し続けていることが示された。
11.	地域住民と共創して作品を制作することの意義	単	2020年11月7日	環境芸術学会第21回大会(葉山)	アートプロジェクト『KEAT』の活動を包括した実践研究報告『地域住民と共創して作品を制作することの意義』を行った。
12.	おさむシアター- 鉄道の廃車両を活用したミニシアター -	単	2021年5月16日	環境芸術学会春季大会	ひたちなか市那珂湊駅構内で2011年から2019年にかけて実施したアニメーションシアターに関する実践報告。
13.	刻とともに変容する立木彫刻の森	単	2021年11月6日	日本デザイン学会	栃木県小砂になる間伐材を用いた立木彫刻の森をタイムアクシスデザインの視座から分析した。
14.	駅名標を介した地域活性	単	2021年12月12日	環境芸術学会22回大会(葉山)	2021年春に開業した美乃浜学園の駅名標デザインと、それに関連した地域の課題解決の実践報告。
(演奏会・展覧会等)					
1.	GOOD DESIGN EXHIBITION 2015 (G展)	単	2015年10月30日～11月4日	日本デザイン振興会	受賞作《ひたちなか海浜鉄道湊線駅名標》の展示を行なった。 場所：東京ミッドタウン(六本木)
2.	環境芸術学会研究作品発表展	単	2018年11月27日～12月7日	環境芸術学会	《駅名菓トレンシエ》の展示を行うとともに実践研究発表を行なった。 場所：オリエアート・ギャラリー(外苑前)
3.	環境と芸術1964TOKYO2020	単	2018年10月1日～10月6日	環境芸術学会	《リソースグラム》の展示を行うとともに実践研究発表を行なった。 会場：増上寺(港区)
4.	いばらきデザインフェアin銀座	単	2019年2月9日～15日	茨城県デザインセンター	《駅名菓トレンシエ》の展示・販売を行なった。 会場：IBARAKI sence(銀座)
5.	いばらきデザインセレクション受賞展	単	2018年12月1日～12月20日	茨城県デザインセンター	《駅名菓トレンシエ》の展示を行なった。 会場：茨城県庁(水戸)
6.	いばらきコンテンツコレクション4	単	2019年2月22日、23日	茨城県デザインセンター	《駅名菓トレンシエ》の展示・販売を行なった。 会場：M-SPO(水戸)

7.	みなとメディアミュージアム	共	2013年～2019年□	MMM実行委員会	廃車両を改装したミニシアターで東京芸術大学の協力のもと、インディペンデントアニメーションを上映。ディレクターとして企画全体のとりまとめを担当。
8	第13回 世界ポスタートリエンナーレトヤマ2021	単	2021年7月10日～9月5日	富山県立美術館	入選に伴い富山県立美術館にて作品展示を行った。 会期：2021年7月10日～9月5日 会場：富山県立美術館
(招待講演・基調講演)					
1.	いばらきコンテンツコレクション4『コンテンツ活用シンポジウム』	共	2019年2月22日	茨城県産業戦略部産業政策課	茨城県庁が主催するイベント『いばらきコンテンツコレクション4』にて、地域デザインをテーマに、90分のシンポジウムを行なった。 会場：M-SPO(水戸) 登壇者：蓮見孝(筑波大学名誉教授) 吉田千秋(ひたちなか海浜鉄道代表取締役社長) 小佐原孝幸(常磐大学助教)
2.	NPO法人なかなかワーク総会講演「地域の魅力を掘り起こす ひたちなか市の新観光案内板」	単	2017年5月21日	NPO法人なかなかワーク	ひたちなか市那珂湊地区にあ新たに設置した観光案内板の設計思想と市役所との協業について講演 会場：ひたちなか商工会議所
3.	ひたちなかフォーラム2017シンポジウム「人が集まるひたちなかの魅力」	共	2016年2月14日	ひたちなか市商工課	本フォーラムでは、市民が主役のまちづくりを一步進めることを目的として、廃線の危機にあった湊線を市民の力で残したノウハウを全国に周回しようと活動しているローカル鉄道・まちづくり大学の話題を中心に地域活性に従事する専門家を招き、パネルディスカッションを行い、聴講者も登壇者全員でまちづくりの考えを共有した。 会場：ワークプラザ勝田 大会議室 登壇者：海野裕(株式会社インターテクト代表取締役・ローカル鉄道地域づくり大学事務局長) / 佐藤彦三郎(ローカル鉄道・地域づくり大学理事・おらが湊鉄道応援団団長) / 小佐原孝幸(デザイナー・常磐大学非常勤講師)
(受賞(学術賞等))					
1.	全国菓子大博覧会 名誉総裁賞	単	2013年4月1日	全国菓子工業組合連合会	受賞対象：菓子《イチゴダッペ》
2.	ひたちなか市功労表彰	単	2014年11月	ひたちなか市	表彰事由：アート・デザインを通じた継続的な地域活動によって、ひたちなか市の発展に貢献
3.	グッドデザイン賞	単	2015年9月	公益財団法人日本デザイン振興会	受賞対象：《ひたちなか海浜鉄道湊線駅名標》(同賞の歴史の中で駅名標として初の受賞)
4.	いばらきデザインセレクション選定	共	2015年10月	茨城県デザインセンター	受賞対象：アートプロジェクト《みなとメディアミュージアム》
5.	いばらきデザインセレクション知事選定(最高賞)	単	2018年10月	茨城県デザインセンター	受賞対象：菓子《駅名菓トレンシエ》
6.	いばらきデザインセレクションシリーズ選定	単	2019年10月	茨城県デザインセンター	受賞対象：《ひたちなか市観光案内板》
7.	環境芸術学会 奨励賞	単	2020年11月7日	環境芸術学会第22回大会	リソースグラムを核とした一連の制作研究活動が評価され奨励賞を受賞した。併せて受賞者記念講演を行った。

8.	世界ポスタートリエンナーレヤマ入選	単	2021年7月	富山県美術館	受賞対象：ポスター《眠っている生得性の発現》
9	環境芸術学会 優秀プレゼンテーション賞	単	2022年5月12日	環境芸術学会春季大会	口頭発表「タイムアクシス・デザインから見る立木彫刻作品の価値」で受賞。

研 究 活 動 項 目

助成を受けた研究等の名称	代表, 分担等の別	種 類	採択年度	交付・受入元	交付・受入額	概 要
(競争的研究助成費獲得(科研費除)) 1. 茨城県コンテンツ活用ブランドUP補助金茨城県コンテンツ活用ブランドUP補助金	代表		2017年	茨城県産業戦略部産業政策課	60万円	社会福祉法人ハートケアひたちなかとともに就労者の工賃向上を目的とした菓子の開発を行った。
2 域学連携実証研究事業	分担		2012年	総務省地域力創造グループ人材力活性化・連携交流室	100万円	総務省から委託を受け、ひたちなか市を対象に域学連携の実証研究を行った。
(学内課題研究(共同研究)) 1. アート・デザイン活動による学生と地域との連携およびその教育的効果に関する研究	分担		2012年	常磐大学	100万円	那珂湊地区『ドゥナイトマーケット』をフィールドに継続して、ワークショップを行いその教育的効果を測定(共同研究者:中村泰之、石田喜美、小佐原孝幸)